

「森の中」の保育園 地域住民に開放

「木の温かさ体感を」

扉を開けると、ふわん、と木の香りに包まれる。今年4月に開園した市川市北園分4丁目「風の谷保育園」は、間伐された国産材をふんだんに使い、伝統的な木構法で建てられた珍しい園舎だ。「地域の文化財にしていきたい」と12月から、地域への開放を始める。子どもたちの遊びを見守りながら、国産材の建物の魅力にも触れてほしいという。

明るい日差しが注ぎ込む園舎は1階が480平方メートル、2階が170平方メートル。太い柱には樹齢140年の木曽産ヒノキ。天井のアーチ材は、30年もののヒノキの間伐材だ。構

造だけでなく仕上げや家具まで、使われているのはヒバ、

市川・風の谷保育園

栗、杉、赤松など国産材ばかり。集成材も接着剤も塗料も金具も一切使わず、森の中のように呼吸の楽な空間が実現した。分厚い無垢材の床を子どもたちが裸足で楽しむ。

同園は、近くにある「さかえ保育園」の第2園として、社会福祉法人「泉の園」がつくった。「感受性豊かな子どもたちに、自然に近い器を」との願いに、孫を「さかえ」に通わせていた縁で、伝統木構法の普及活動で知られる1級建築士の増田一真さん(74)が応えた。腕のいい大工たちが

も集まった。

間伐材を有効活用し伝統的な木組みで100年以上もつ丈夫な建物をつくる増田さんの構造設計に、長野県南木曾町の南木曾木材産業の柴原薫社長(48)が「山の人間にとっても勇気づけられる」と採算を度外視して協力した。輸入材に押され、国産の間伐材は放置され使われない状態に心を痛めてきたという。

土地は市が有償で提供し、建設資金約2億2300万円は、市の補助金と園の自己資金、借入金でまかなった。

「子どもたちに本物の感触を味わわせたい、と夢見た建物が実現したのは奇跡のよう」と園長の川副孝夫さん(60)は話す。「木のぬくもりと子どもたちの笑顔は元気をくれる。ぜひ地域の人たちにも感じてほしい、地域の文化財にしていきたい」

「TANIGAWAのふれあい」は平日の午前中。子どもたちと一緒に歌ったり、昔の遊びを教えたり、世代間のつながりをつくってほしい、という。園舎の開放は土曜日。いずれも無料だが、希望者は事前登録が必要。問い合わせは同園(047・375・2700)。



アーチ部分も間伐の丸太が使われている。接着させて作った集成材より丈夫で長持ちするという。いずれも市川市北園分4丁目、風の谷保育園



樹齢140年のヒノキの柱(左)は、保護者や職員らがヌカ袋で磨き上げた。迎えに来た親に見せようと、子どもたちがよじ登る